城東じ・ば・子の「茶の間」における
学生による地域福祉研究報告

社会福祉学科　　堀川 涼子

１．背景と目的

我が国においては、血縁・地縁が希薄化し、少子高齢化の進行も相まって地域住民同士の関係の希薄化が進んでいる。そのため津山市内でも特に少子高齢化が進む城東地区において、そのまちづくりや多世代交流に大学生が関わることは大きな意味があると考える。さらに、学生にとっても、学内で机上の勉強をするだけではなく、実際の地域に出向いていき、地域住民と協働して地域の生活課題に触れ、その解決のための活動を行うこと、実際に認知症当事者やその家族と直接かかわることは、これからの「地域を基盤としたソーシャルワーク」実践の体験的な学びとなる。

これらのことから本研究は、「城東じ・ば・子」の活動の意義やソーシャルワーカーをめざす学生の成長を追っていくことを研究目的としている。ただし、2020 年度は新型コロナウィルス（以下、コロナ）感染拡大により、これまでとは違う活動になった。コロナ禍でも地域のつながりを切らないために行った活動について報告する。

２.地区の概要

津山市城東地区は津山のシンボル鶴山城の東に位置し、北は丹後山、南は吉井川にはさまれた地区である。13 町内会からなり、人口は 1,222 人、世帯数は 644 世帯、高齢化率は 44.0%、年少人口比率は 9.7%であり、市内でも少子高齢化率の高い地区である[1)]。旧出雲街道沿いには古い町並みが並び、伝統的重要建造物群保存地区に選定されている。観光地としての整備が進む一方で、丹後山にかけての急な坂道や狭い路地が多く、空き家が目立ち、昔ながらの日常生活を扱う商店も減り、生活に支障のある高齢者は少なくない。

３．学生による地域福祉活動

ここでは、城東地区における活動を紹介する。

①「じ・ば・子のおうち」

「じ・ば・子のおうち」プロジェクトとは、少子高齢化が進む城東地区において、子どもと高齢者等世代を超えたつながりを作り、地域の課題解決をめざすことを目的に、2012 年から行ってきた三世代交流の地域福祉活動のことである。その拠点を「じ・ば・子のおうち」と呼んでいる。構成員は城東まちづくり協議会地域福祉事業部を母体とし、津山市社会福祉協議会・地域包括支援センター、津山市健康増進課、そして美作大学社会福祉学科自主ゼミである。2020 年度には自主ゼミ活動として 7 年目を迎え、初代から隔学年で関わってきた学生は、5 代目の 3 年生 12 名が活動を行った。

②「じ・ば・子のおうち『支縁』」

「じ・ば・子のおうち『支縁』」とは、「じ・ば・子のおうち」の活動をもととして、城東地区にある空き家を大学が借り上げ、2015 年 11 月から学生が居住し、「地域住民」として地域福祉活動を実践している地域拠点のことである。学生の居住空間である『支縁』と、別棟の共同スペースである『じ・ば・子の茶の間』で構成されている。

③ふらっとカフェ

ふらっとカフェとは、津山市が勧めている「歩いて行ける範囲に、フラットな人間関係で、近隣同士が気軽にふらっと通える場」のことである。住民主体のこの取り組みを『支縁』入居学生が 2019 年 5 月から、不定期ではあるがふらっとカフェ「お楽しみ会」として『じ・ば・子の茶の間』にて行っている。

④認知症支援「おあしすカフェ」

『じ・ば・子の茶の間』を活用して、2016 年から月に 1 回、認知症支援「おあしすカフェ」を開催している。認知症カフェとは、国の「認知症施策推進総合戦略オレンジプラン」によると「認知症の人やその家族が地域の人や専門家と相互に情報を共有し、お互いを理解し合う場」とされている。

おあしすカフェは、津山市認知症の人と家族の会「おあしすの会」との共同開催であるが、企画運営に学生が関わり、地域福祉活動実践と認知症高齢者支援を体験している。学生の役割は、当日までにレクリエーションや体操等の企画準備、当日の会場設営、来客の対応、認知症のご本人や家族の話の傾聴、レクリエーションや歌唱の支援、そして片付け、報告書の作成などである。その中でも特に認知症のご本人とのコミュニケーションを図ること、ご本人や家族の生の声を聴きその生活に思いをはせることは学内の授業だけではできない貴重な経験となり、学生の大きな成長につながっている。

４．地域活動の自粛や中止

認定特定非営利活動法人日本都市計画家協会（JSURP）が 2020 年 6 月 1 日から 8 日に実施した「コロナ禍におけるまちづくり活動団体への影響に関するアンケート」によると、新型コロナウィルス感染症により、多くの地域の活動が自粛し、2020 年 4 月 16 日から 5 月 14 日まで全国に発出された緊急事態宣言によって中止になった。

さらに、JSURP が過去に関連したまちづくり団体（日本都市計画家協会賞受賞団体、地域主体のまちづくり事業参加団体、JSURP 会員が業務等で関係した団体 など）85 団体へ行ったアンケートでは、感染防止に伴う自粛が解除された場合でも半数の団体が「活動自体は停滞する」と見込んでいるという結果が出ている。コロナ禍におけるまちづくり活動の課題で最も多かったのは「関係者が集まれない」（52/85 団体）であり、過半数を占め、活動の企画自体への問題があげられた。ついで、「参加者が見込めない」（48/85 団体）、「活動の場所を自由に使えない」（42/85 団体）といった対外的な活動の問題があげられた[2)]。

また、全国におよそ 7000 か所ある「認知症(オレンジ)カフェ」について厚生労働省などが初めて行った調査で、回答があっただけでも 80%を超える認知症カフェが、新型コロナウィルスの感染拡大により 2020 年 8 月時点で再開に踏み切れず、利用者に影響が広がっていることが分かった[3)]。

このような中で、「城東じ・ば・子」で行ってきた「地域の課題を地域住民とともに考え、その解決を考え、取り組んでいく」という具体的な地域福祉実践も大きな影響を受けた。①「じ・ば・子のおうち」の活動は月に 2 回の子どもの居場所事業や月 1 回の高齢者講座等が中止。お泊り会や運動会、文化祭等の年中行事も中止となった。②「じ・ば・子のおうち『支縁』については、町内会活動が中止となる中で③ふらっとカフェ等も自粛を余儀なくされ、年 2 回の開催のみで、声かけも『支縁』近隣の狭いエリアだけに絞らざるを得なかった。④おあしすカフェは特に認知症等介護が必要な高齢者やその家族を対象とした取り組みであるため、感染拡大を恐れてカフェの中止や時間短縮、開催場所や内容の変更等をすることとなった。このように例年であれば、集い、交流し、孤立や閉じこもり、人間関係の希薄化という地域課題に取り組んできた活動が思うようにできない状況が城東地区でも現在も続いている。

５．コロナ禍での活動

このような状況において、出ていく機会が少なくなったり、外出を自粛したりすることにより地域の中でも住民同士が顔を合わせる機会が減少している。交流の減少によりこれまで以上に関係の希薄化が心配される。そこで、それぞれの活動において、コロナ禍でもできることを検討し、活動の継続を工夫した。

①じ・ば・子の声・想いを届けるプロジェクト

地域住民のふれあいや集まりの機会が失われることにより、地域のつながりが途切れてしまわないように、地域のつながりを再確認し、再構築することを目的としたプロジェクト。具体的には城東地区に居住する小学生等の児童や、民生委員、愛育委員、老人クラブ等の会員が書いたメッセージ入りハガキを、じ・ば・子関係者と学生が一人暮らし等の高齢者に届け、高齢者にメッセージや絵などを返信してもらうことで相互のつながりを実感する取り組み。

○1回目（約50枚）
5月30-31日　子どもへハガキ配布
7月4日高齢者へポスティング

○2回目（約150枚）
11月3日　子どもや民生委員等へハガキ配布
12月12日高齢者へポスティング

高齢者からの返信ハガキは城東屋敷に飾り、多くの人の目に留まるように展示した。

津山市城東地区の住民らが地区内に開設した高齢者と子どもの交流拠点「じ・ば・子のおうち（じば子）」（上之町）の交流イベントが、新型コロナウイルスの感染拡大で開催できていないことから、市連合町内会城東支部と城東まちづくり協議会は、はがきのやりとりで交流する取り組みを行っている。コロナ禍で人と接する機会が減っている高齢者を元気づけようと企画した。（山根上貴）

はがきで声届けます

城東地区の住民ら

「じ・ば・子の声と想いをつなぐプロジェクト」と題して実施。地区の子どもたちにはがきを書いてもらい、初回は、約50の高齢者世帯に7月に配った。2回目は約150世帯に規模を拡大。住民や民生委員、じば子の運営委員会メンバーの美作大生ら約30人が、今月12日に各戸を回って届けた。

子どもたちがメッセージを書いたはがきを受け取る城東地区の高齢者（右）

子どもから高齢者へ コロナに負けず「交流」

はがきには、子どもたちが「コロナに負けず頑張って」「これからも元気でいてください」といったメッセージを書いたり、人気アニメキャラクターや、おじいちゃん、おばあちゃんの絵を描いたりしている。

受け取った感想や今の気持ちなどを書いてもらう返信はがきを同封。送り返されたものは、初回分を含め、作州城東屋敷（中之町）や地区内の店舗などで紹介する予定にしている。

はがきを手にした船津吉弘さん（84＝勝間田町＝は「気に掛けてもらってうれしい。最近は子どもたちと接する機会が全くないので元気がもらえる」と話した。

じば子は、多世代交流を目的に、文化祭や体育祭、クリスマス会などを行っているが、今年はすべて中止している。城東支部の小林正明支部長は「新型コロナが収束するまでは、はがきでやりとりを続けたい」と話している。

（C）山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。

2020年12月15日 山陽新聞朝刊 26ページ

②ふらっとカフェ

隣近所の小さな集まりだからこそできる活動として、臨機応変にコロナ感染が少し収まったタイミングで2回開催した。

緊急事態宣言が明けた6月28日　第6回ふらっとカフェ「お楽しみ会」を行った。あらかじめ笹の用意を町内会長にお願いしたこともあり、町内の男性4人の参加があり、みんなでコロナの収束を願い七夕を飾った。

同様にコロナ感染第 4 派の前の 11 月 22 日に第 7 回ふらっとカフェ「お楽しみ会」を開催した。貼り絵を用意していたが、参加者の提案で落ち葉を拾いに行き、それを画用紙に張り付けて完成させた。学生はコロナ禍でもあり、参加者がいないのではないかと不安に思っていたが、「久しぶりの集まりだから楽しみにしてきた」「遠くに行くことは自粛しているが、町内の集まりだから参加した」という参加者の声があり、「ふらっとカフェ」の開催意義を感じていた。どちらも室内での活動のみならず、屋外での活動を取り入れたことで、いわゆる「三密（密集、密接、密閉）」を避けられ、コロナ感染防止対策にもなった。

③おあしすカフェ

2019 年は毎回、部屋が狭いほどの盛況ぶりで、食事を共にすることで親睦が深まっていた。しかしコロナ感染防止のため、2020 年は、飲み物は一人ずつペットボトルを配布し、食事の提供は無し、時間も 2 時間のみの開催とした。高齢者が感染すると重篤化し、命にかかわることから外出そのものを自粛している高齢者やその家族も多く、積極的な呼びかけができなかった。集まることが憚れる中、つながりを切らない方法はないかと模索し、「紙面カフェ」や「おあしす散歩」を試みた

4 月中止	9 月カフェ	1 月紙面カフェ
5 月紙面カフェ	10 月カフェ	3 月中止
6 月おあしす散歩	11 月紙面カフェ	
7 月おあしす散歩	12 月クリスマス会	

＊例年 8 月・2 月（または 3 月）は休み

表 1「おあしすカフェ」月別来所者等数　　2020 年 4 月～2021 年 3 月

	ご来所者内訳							来所者計
	①当事者（本人）	②介護家族	③地域住民	④福祉系専門職	⑤美作大教員学生	⑥おあしすの会	⑦その他	
4月								
5月	9	19	4	2	0	8	2	44
6月	3	10	0	3	8	1	2	27
7月	6	7	0	0	4	3	1	21
9月	4	5	0	1	7	1	1	19
10月	4	7	0	0	6	1	0	18
11月	9	19	4	2	0	8	2	44
12月	7	17	0	1	7	7	0	39
1月	9	19	4	2	0	8	2	44
3月								
合計	51	103	12	11	32	37	10	256
2020年度平均	4.8	9.2	0	1	6.4	2.6	0.8	24.8

なお、5 月・11 月・1 月については、「紙面カフェ」のため、冊子送付数を掲載しているが平均来所者数には含めていない。

来場者数の統計を見ると、地域の方や、おあしすの会（津山市認知症の人と家族の会）のスタッフの参加は減ったが、本人・家族の参加者数はあまり減っておらず、本人や家族にとってのカフェの必要性を改めて感じた。

「紙面　おあしすカフェ」

会場が狭く「密」が避けられないことから、カフェ開催をやむなく中止した 4 月に、常連のメンバー約 40 人に学生からの手紙と、返信用ハガキを郵送した。すると多くの方から近況や思いをつづった返事が届いた。そこで、5 月は参加者から手紙やハガキ、写真を募りそれを冊子にまとめて郵送した。そしてカフェの開催日時に各自お茶やコーヒーを入れて、紙面を見ながらお互いに思いをはせる「紙面カフェ」を呼びかけた。

「紙面カフェをしました」「皆さんの手紙や写真を見てつながりを感じました」と多くの反響があった。メールや SNS 等でつながることが難しい高齢者とのつながりには、時間はかかるがオンラインではなく手紙やはがき等のやり取りが有効であることが分かった。

再び感染が拡大した 11 月と 1 月にも紙面カフェを行った。

「おあしす散歩」

緊急事態宣言の解除後の 6・7 月は「三密」を避けて、旧津山藩主の名庭「衆楽園」で散歩をする「番外編　おあしす散歩」を企画した。園内の迎賓館を休憩所とし、一人ずつペットボトルのお茶を配布した。再会についつい話が弾み、「ｿｰｼｬﾙ・ﾃﾞｨｽﾀﾝｽ！」と何度も声をかける場面もあったが、爽やかな風が吹く中で「久しぶりに体を動かして気持ちが良かった」と好評であった。

６．まとめと考察

コロナ禍で当たり前に思っていた人とのつながりの大切さを、改めて実感した人が多いのではないだろうか。地縁、血縁が薄れてきたとされる中、地域のつながりは意図して生み出さなければならなくなった。本来の活動が困難になっても「できること」を模索し新たな活動を生み出した今回の経験は、これからの社会で必ず生きていると感じている。

コロナ禍で、活動に様々な制限があった。しかし常に「何のための活動」なのかを学生とともに振り返り、安易に「感染防止により中止」とするのではなく、目的に応じた活動を考え、新たな試みを行うことができた。ルーティンの活動よりも、活動目的を意識しながら模索することは、学生にとってもより活動の意義を実感できたと考える。

引用文献

1)「津山市統計書」2021 年 1 月 1 日現在

2) 認定特定非営利活動法人日本都市計画家協会（JSURP）「『コロナ禍におけるまちづくり活動等の影響』に関するアンケート調査の結果報告」

3) NHK ニュースサイト 2020.11.01
https://www3.nhk.or.jp/news/html/20201101/k10012691311000.html